

## いにしへの田口線を訪ねる

12月6日今年最後になるあいち観光まちづくりゼミの、田口線の廃線跡を訪ね清酒「空」で知られる関谷醸造を見学するモニターツアーに参加しました。

### 鶏に助けられた家康の話

今回の参加者はゼミ生16名、受入れの新城・設楽チーム8名と事務局4名の28名ということだった。東浦ふるさとガイドは3名参加しました。隣のあぐいふるさとガイドから私たちの会員でもある方を含め2名が参加、それに大府、豊明、南知多からも参加していました。

金山を8時10分に出発し、東名から新東名へ入る直前の浜松いなさICを出て国道257を新城へ向かう。つまり、先に静岡県に入ってから愛知県に戻り新城へと向かうのだ。高速道路が張り巡らされてくると、こうした経路が近道になるわけだ。途中、三石と言う地を通るがここに道の駅「みかわさんごく」があり、その背後に満光寺がある。この寺は曹洞宗の古刹で小堀遠州流の回遊林泉庭園が知られるが、それよりも、徳川家康が若かりし頃武田軍に追われて逃走の途中、ここに宿をとり朝ではなく夜中に鳴いた鶏の鳴き声を、一番鶏の鳴き声と勘違いして、出立したことで武田軍の追撃をかわし命拾いをした。それに感謝するため家康は寺領三石の黒印状を与えたという話が伝わっている。寺領三石を与えたとはいえ、実際は朝ではなく夜中に鳴いた鶏に三石を与えたことになり、これが話題となり後々まで伝わることになったもの。



浜松いなさICを出る



奥平仙千代の墓

そんな説明を聞きながらインターを出て30分、予定通り10時30分鳳来寺に到着した。山間部にありながらちょっとした広場になっている、実はここが昔の田口線の鳳来寺駅の跡だった。バスを降りると周囲の山々は紅葉しておりすがすがしい気分になれる、大きなモニュメントがあつて隣に「奥平仙千代の墓」の旗があつた。はて誰のことかと旗のところまで行くと、石の柵で囲まれた中にさほど大きくはないが宝印経塔の墓がある。手前に説明板があり、作手の奥平貞能とその子貞昌(後の長篠城主)は元亀2年(1571)武田信玄に降伏したので、二男仙千代らを武田方へ人質に差し出すことになった。

天正元年(1573)になって貞能親子は武田氏に背いて徳川家康についたので、武田勝頼は彼を門谷の金剛堂前で処刑したとある。こうした話しはその地へ行かないことには分からないものだ。

## 古老に聞く昔の田口線にまつわる話

現地集合の人も集まり、広場前のおかめ茶屋にて、田口線について古老たちのお話を聞きました。部屋には田口線の思い出の写真がたくさん並べられていました、3人の方が話をしてくれました。



田口線について昔の思い出を聞く

最初に話をしてくれた小笠原さんは85歳とのこと。昭和4年生まれで、田口線開通の年に生まれたそうです。

☆当時は牛車や馬車の時代で、セメントは重さ60kgあり二人で担ぎました。コンクリートには川砂が必要だったが、ここでは山砂を川で洗って使いました。

☆一日働いて65銭のころ、鳳来寺～豊川までの電車賃は65銭でした。

☆田口鉄道の株50円券を2株買わされて今も記念に持っています。

鈴木さんは田口鉄道に勤務した方で…

☆昭和38年に入社しました。毎朝、5時ころの始発電車が走る前に全区間の線路・架線を人力のトロッコに乗って点検しました。山間部の事で、冬場は架線にツララが付いていないかの点検をしました。特に竹が架線に垂れ下がっていないかも注意しました。点検が終わって本社へ連絡すると、電気が流れて電車が動けるようになったのです。

☆廃線になって以後はその区間を走った定期バスの運転手をしました。

もう一人の一番若い山下さんと言う方は…

☆保育園に通うのに田口線を利用していました。保育園が隣駅の玖老勢（くろせ）にできたからです。

☆小さな「マッチ箱」と言われる電車に乗れるのが楽しみでした。

☆高校生の時、始発電車に乗らないと補修授業に間に合わなくなりましたが、鳳来寺駅からの乗客は私一人だけで、時には遅れても待っていてくれました。

☆11月23日ごろのモミジ祭には飯田線から電車が直接乗り入れるくらい人が来ました。鳳来寺の駅を降りると、五平餅1本の引換券を配布しました。

☆当時の運行は5:00～20:30くらいでした。本数はどれくらいあったか忘れました。

☆鉄橋の一つは電車が下を走り、車や人が上を通る道路の橋がありました。上下逆の橋はほかにもありましたが、珍しかったです。

## 田口鉄道のはじまりと廃線の歴史

この地域での鉄道は、明治33年(1900)に豊川鉄道が、豊橋から長篠の間で営業を始めたことからスタートしました。その後大正12年(1923)には、鳳来寺鉄道が「長篠」から「三河川合」までの運行を開始し、これらの沿線から外れた田口町などで、鉄道への想いが高まっていきました。

そこでまずは豊川鉄道と鳳来寺鉄道に、資本と建設や経営の協力を仰ぎました。また、御料林(明治憲法下で皇室が所有する森林)である、段戸の木材の運び出しという名目から宮内省にも働きかけました。その結果、出資と経営参加の取り付けに成功しついに工

事が施行されます。昭和4年5月22日、鳳来寺口(今の本長篠)～三河海老の間11.6kmで田口鉄道が営業を始めました。

そして、昭和7年12月22日、本長篠(開業当時の名前は鳳来寺口駅)から三河田口までの全線22.6kmが開通したのです。この間に駅は11あり、全線電化(直流1,500V)の軌間1,067mmで今のJRと同じです。

人々の強い思いから開通した田口鉄道。昭和26年頃には観光開発ブームが起り、田口鉄道を利用しての観光客や、木材の運搬なども盛んに行われます。しかし、このころをピークに車の普及や過疎化の進行により、利用客の減少が進みました。昭和31年に名古屋鉄道系列の豊橋鉄道に併合され、豊橋鉄道田口線となります。そして昭和39年豊橋鉄道から田口線廃止を通知されます。沿線の町村や住民、そして議会や商工会などの各団体により懸命な廃止反対の活動が行われましたが、昭和43年8月31日「さようなら列車」の運行を最後に、たくさんの人に惜しまれながら田口線は廃止となりました。

## 田口線の廃線跡を歩く

バスで少し移動して降りたのは田んぼの脇、そこから山側の道に入った少し広い場所でガイドさんの話を聞く。予定通りの11時20分ころにウォーキング開始、歩き始めるとすぐに道路より低い山裾に小さなトンネルが見える。田口線の下をくぐりぬける生活道路だったという。もちろん今は使用されていない、その先でやたら犬が吠える民家の前を抜けると、黄色が鮮やかな銀杏の葉が敷き詰められた細い道が続く。道端には野生のランが碧い実をつけていた。



ウォーキング前の説明を聞く



三河大草駅の跡



ここからいよいよ廃線跡へ向かう山道で、一人がやっと通れるほどだ。草は刈られていたものの、滑りやすいので注意が必要、滑って 10mほど落ちたら大怪我をする。今回のモニターツアーのためにみなさんで草刈りをしてくれたと言う。わずかに平らな部分があるものの、杉の木が生えて林になっているが昔は田んぼだったという。そんな斜面の道には 15cm ほどの草で、赤い小さな実をつけた冬イチゴがあちこちにあった。食べてみたがあまりうまくなかった。しかし昔は子供の良いおやつだったにちがいない。15分くらいで田口線の三河大草駅跡に到着した、線路跡の片側だけにホームがあって、今もそのまま残されており、その先にトンネルが見える。トンネルの向こうの集落の人はトンネルの中の線路上を歩いて駅へ来たそうです。

このような風景はまさに廃線跡を象徴するシーンで、すばらしかった。この風景に紅葉があれば言うことなしだが、周りは杉の木ばかりのようだった。ここが駅で集落はこの辺りにあったのか、ここまでの道のりではそんなに民家はなかったし、あったような気配は感じられなかったが。そんなことを思いながら何枚かの写真を撮った。また、当時の三河大草駅に停車する電車のパネルを持参して説明をしてくれたが、それを見ていると今にも電車が走ってくる姿が想像され、ガイドするテクニックとしてとても良いと思った。



三河大草隧道をぬけて...



狭い谷間に段々畑が続く

## トンネルを抜けると段々畑が...

三河大草駅跡から見た三河大草隧道を歩くと、入り口はコンクリートが巻いてあるがほとんどは岩肌が露出したままであった。照明もなく暗くて足元が悪いので前を見るのではなく、時々前方を見ながら下ばかりを見て歩いた。トンネルを抜けるとそこは狭

い谷間で、段々畑が山に向かって、ずうーと続き、脇に道路があり民家が2軒だけ見える。これこそ多くの人があこがれる山里の風景といえる。こんな構図が好きですぐにシャッターを押した。おてんとぅさんが降り注ぎ小春日和を思わせるほどで、ウオーキングにもってこいである。その先にもう一つのトンネルがあり、手前にはゆずの木がたくさんの実をつけていた。そのトンネルを抜けると、今度はとても広い場所になっていました。駅の跡地でもないと言うが、何だったのだろうか。

その広場にブルーシートが敷いてあって、丁度12時ころでどうやらここでランチらしい。そして配布されたのは竹の皮(実は紙製)で作った弁当箱とお茶、それにミカン一個。みなさん思い思いに腰をおろして弁当を開く。



蓋を取ると田口線弁当と書かれて二つ折りにしたお品書きがありとても立派なものだ。それをとると色づいたモミジの葉が2枚添えてあり、アユの一夜干しが真ん中にある。右側におにぎりが三個、そのおにぎりにつけるため竹の葉を三角に折って蓆(ふき)味噌が入れてあった。ほかにシイタケの煮もの、イノシシ肉の味比べと漬物が二種類。私好みのものばかりで、お

にぎりにつける蓆味噌は特に旨かった。あじのある弁当箱と言い、盛り付けや中味がとても **guu** で満足した。こんなお弁当なら駅とか道の駅で販売しても良い、と言うのが皆さんの声でした。

## 奥三河の山道をドライブ

おいしい弁当を食べた後は、来た道を帰りバスに戻る。このあとは田口まで移動してお酒の「空」で知られる「関谷醸造」を見学する。13時ころに出発してバスは旧田口線跡に並行しながら、あるいは今は道路になった部分を守る。昔は愛知県で一番長かったという稲目トンネルを抜けると田峯の町。ここは江戸時代に村人の願いにより真夏に雪を降らせた、という霊験で知られる田峯観音、さらには田峯田楽、奥三河における代表的な山城として知られる田峯城がある。この田峯城は菅沼定信が築城(1470)し、お城鎮護のため田峯観音を建立したといわれる。

田峯からは国道257を走り、町を過ぎてしばらく走ると設楽町の「関谷醸造」に到着し

ました。お店の前には特大サイズの「蓬莱泉」の酒びんが、そびえるように立ってお客さんを呼び込んでいます。

## 初めは二級酒だった「空」

今の時期は見学ができないということだったが、特別の計らいで関谷醸造さんの見学ができるのも、今回のあいち町づくりゼミの特典といえる。酒造りの建物は東浦町生路の原田酒造さんとは違い、近代的な設備を備えていました。エレベーターで3階の部屋へ案内され、挨拶に現れたのは小柄な女性で、彼女が工場の案内をしてくれました。紙で作られた白い上着と帽子を着用して工場の中へ入る。



関谷醸造さんのお店



蒸米を取り出す行程

最初に案内されたのは蒸米を作る工程。ここでも女性が蒸し上がったお米を大きな釜からかきだしています。そのお米を案内の女性が取り出して少しずつ分けてくれました。受け取って口にすると、これが少し固めで旨い。次はもろみ仕込みの行程で、蒸米に麴・酒母・水を加えてもろみを作る。ここでは泡の状態を観察して、アルコール発酵の進み具合を判断するという。そして、約1ヶ月かけて発酵させたもろみを圧搾し、清酒と酒粕に分けるプレス機を見たがとても大きなものだった。その次にできたお酒を貯蔵するタンクを見ました、昔からのタンクは緑色で東海珺瑯工業株式会社製造の、ホウロウ仕上げの物が使われている。容量はいずれも10,000ℓ余のものでした。

説明の中で記憶に残ったのは、

- ① 「空」は最初二級酒だった、それがロコミで知られて売れるようになった。しかし、使用する山田錦と言うお米に限りがあり、当社のみが独占できるものでもなく、数量

は限定される。

- ② 昔は新潟から杜氏が来ていたが、今ではこちらの方が資格をとり対応しているという。このあと試飲があったが、私の舌ではお酒の味がよく分からなかった。売店ものぞいたが、お酒はほとんど飲まないのも何も買うものはなかった。



麴の説明



試飲を楽しむ

このあと奥三河郷土館に立ち寄った後、隣の奥三河総合センターで今回の反省会を行い帰路についた。国道 257 号線を走り稲武の町へ出て、国道 153 号線で力石まで行き、猿投グリーンロードを走って金山駅に予定通り 19 時に到着しました。充実した 1 日でした。